第十九章　京都堀河館　―　土佐坊昌俊

都では、義経が頼朝に門前払いを食らわされて鎌倉へ入れなかったことがすでに知れ渡っていた。頼朝と義経の兄弟の不仲が公然とささやかれ始めた。

前大納言時忠は能登への配流が決まっていたにもかかわらず、義経による庇護を理由に京に居座り一向に出て行く気配がなかったが、その後鎌倉からの苦言でしかたなく配所へ落ちていった。そして、蕨姫も父親に同行して京から姿を消した。父親が罪に問われるかもしれない秘密文書を取り返し、父親の助命がかなったいま、蕨姫の役割も終わり、もはや義経の側室でいる理由がなくなったのであろう。

郷子は、胸をなでおろしたが、一方、義経の心が傷つくことを思うと、あまりにも身勝手な時忠に「恥しらず」と言ってやれなかったことを後悔した。

義経は、凱旋軍として大群衆に送られて意気揚々と出発したときとは違って、わずか数十騎程の郎党と共に闇にまぎれ密かに京の六条堀河館に帰ってきた。

郷子は、帰還を知らされていなかったので、義経の帰還を堀河館で迎えることが出来なかった。しかし、その夜兄の小太郎が室町亭に現れて帰還を知らせたので、郷子は、もう目立つようになったお腹を抱えて、志乃を連れて堀河館に出向いていった。

大広間に入ると、いつもは義経が将兵や女房達に囲まれて賑やかな宴会をしているのに、帰還した側近が黙々と酒を飲みながら食事をしているだけで義経はいなかった。

堀河館は奇妙な静寂に包まれていた。

郷子が、義経の居室に入って行くと、義経が一人静御前のお酌で酒を飲んでいた。悄然としてひどく孤独に見えた。

郷子が、部屋に入ると義経は一瞬不思議そうな顔をして郷子を見た。

郷子は、義経の前に正座すると、挨拶しようとしたが、もう体は前に屈めなかった。そこで、簡単な会釈ですませると言った。

「お帰りなさいませ」

「無理をするでない。身体を楽にしたら良い」

「大丈夫でございます」

郷子は、義経の気配りが嬉しかった。

「もうすでに聞いていようが、兄者には会えなかった」

「何故でございましょう」

「兄者も景時の讒言に惑わされているのだ。景時の奴は、屋島でも壇ノ浦でも何の戦果も上げられなかったので、俺のやり方にけちをつけて、それを帳消にしようとたくらんでいるのだ」

「ひどい話ですね」

郷子は、それしか言えなかった。

「それに、一緒に凱旋した将兵も北条時政が命令したら、俺の許可も受けずに坂東へ帰

ってしまった。凱旋できたのは、だれのおかげだと思っているのだ。みんな冷たい奴らばかりだ」
「戦が終わったので故郷の家族のもとへ早く帰りたかったのでしょう」
「お前はどうなのだ。俺はお前がもう既に河越に帰っていてここには居ないものと思っていた。遅ればせながら小太郎と一緒に河越に帰ったらいい」
　郷子は、突然涙が溢れてきたので自分でも驚いた。
　確かに、須美を通じてそのような話があった。しかし、自分は義経のもとを離れて河越で出産する気持ちは毛頭無かった。義経は、自分の義経に対する気持ちを全く判っていない。郷子は、涙が止まらなかった。静が義経をにらみつけた。
　義経は、ひっそりと泣いている郷子を見ていたがぽつりと言った。
「蕨姫のことは、二人に申し訳ないことをした。あいつは、俺を利用しただけだった」
　郷子は、（いまさらなによ）と腹が立つが、義経が謝ったので許すことにした。
「捕虜の宗盛・清宗親子はどうされたのですか」
　郷子は、ようやく話すことが出来た。
「兄者に京に帰る途中で誅殺することを命じられたが、なかなか実行できなかった。近江国まで来て、やっと心を鬼にして実行したが、一ヶ月以上も一緒に旅をして、その間涙ながらに何度も助命を嘆願されていたので、本心つらかった。二人とも、人の良い小心で臆病な男に過ぎなかったから、なおさら気の毒だった。誅殺したときの二人の泣き叫ぶ声がまだ耳に残っている」
　義経は、悄然として元気が無かった。旅の疲れからか、酒に酔ってうつらうつらし始めたので、郷子は、静に軽く会釈するとそっと部屋を退出した。
（義経をなぐさめるのは、彼を知り尽くした静のほうが上手くいくだろう）

　追い討ちをかけるように鎌倉からの命令で、平家滅亡後に義経の預かりとなっていた平家没官領二十四ヶ所がことごとく取り上げられ、他の御家人に与えられた。これによって義経の大きな経済的基盤が失われた。だが、検非違使の解任については、何らの命令もなく、義経は引き続き法皇の守護と都の治安維持にあたっていた。
　頼朝は、貴族政治を武家による政治に変革しようと意図していたが、皇室の権威を貶（おとし）めるつもりは全くなく、むしろその権威に恐れ入っていた。この国の形として皇室に反抗すれば、武家政権に対する人民の共感が得られないことを本能的に知っていたからである。法皇が決定した義経の検非違使任官に関しては、義経が頼朝の許可を受けなかったことを問題にしたのであって、法皇の宣旨そのものに異論を挟むつもりはなかったのである。
　都の治安の維持にあたっていた小太郎が訪ねてきた。
「父上の命令で鎌倉に帰ることになった。どうやら、俺が腰越から鎌倉に帰還せずに、判官に従って京に戻ったことに鎌倉殿が腹を立てているらしい。父上がいうには、この

際もし俺が鎌倉に帰らないと、判官と舅の河越氏が組んで謀反を起こす恐れがあるなどといわれることを懸念されているのだ。父上は、お前もお産という名目で河越に帰ったらいいと言っている」
「父上は、わたしにもう実家はないものと思えといわれました」
「俺も実は判官をこのまま残して都を離れるのは粛然(しゅくぜん)としないので、このことを判官に率直に話した。そしたら、俺の気持ちは有り難いが、兄者に謀反を疑われるのも困るので、帰ったほうが良いといわれた。その際、判官から父の言う通り郷子もつれて帰ったらよいといわれたのでこうしてお前の気持ちを聞きにきたのだ」
「わたしまで義経を離れたら、河越氏は婿を冷たく見捨てたと世間に噂されますよ」
「そもそも鎌倉殿が一方的に郷子を判官の正室に決めて、京へ送り込んでおきながら、今度は判官の姻戚だということで河越氏が責められても、たまったものではない」
「・・・・・」
　郷子は返事のしようがなかった。
「河越氏が判官を支えれば、鎌倉から睨まれるし、河越氏が判官から離れれば判官を見捨てたと世間で噂されるし、まったく踏んだりけったりだ。もちろんお前のせいではないが」
「兄上は、鎌倉へおいでください。わたくしは、義経の正室ですからここを離れるわけには参りません。赤子ももうすぐ生まれますしここに残ります」
「お前が判官と離れたくない気持ちは良く判る。それが夫婦というものだろう。俺達のことは、心配しなくてもよい。ここでお前を守ってやれないのは残念だが、達者でな」
　小太郎は、そういうと帰っていった。
　郷子は、もう一つ元気のない義経を励ますために、出来るだけ堀河館に顔を出すことにした。もうはちきれそうに膨らんだ自分のお腹を見てもらえば、元気が出るのではないかと思ったのだ。義経も、郷子の膨らんだお腹をさわりながら、「男だろうか、女だろうか」、「名前は何とつけよう」、「腹をけられるか」などたわいのない話をすると気晴らしになるようだった。
　義経は、検非違使の職務上法皇の御所に出向いていたが、ある時、院の御所から興奮して帰ってきた。
「法皇から、本日伊予守に任じられたよ。北条時政殿が腰越で『頼朝殿は、壇ノ浦の合戦における貴殿の働きに報いるために、伊予守に任ずべく、もうすでに申請書を朝廷に出してある』と言っていたが、これは捕虜の宗盛・清宗親子を引き取るための、方便であろうと思っていたが、本当だった。兄者は、やっぱり俺の事を考えてくれているのだ」
　義経は、単純に喜び機嫌を直して、すぐさま祝宴会を催した。
　主人が元気でなかったために、火の消えたように陰気だった堀河館に明るさが戻ってきた。義経は、また、まわりに女房達を集めて有頂天になって騒いでいた。ただ、参加する配下の数が極端に少なくなっていたので、わびしい感がするのは否めなかった。

だが、子飼いの郎党ばかりだったので、一段と親密な気のおけない宴会で、義経のはしゃいだ声が一段と良く聞こえてくる。郷子は、いつもはそんな宴会を一層盛り上げる役の静がもうひとつ気がのらない様子なので理由を訊いてみた。
「なんだか浮かないご様子ね。なにか心配事でもあるのですか」
「あなただけに話すのですが、また、母の磯禅師が藤原能保殿から話を聞いたのです。それによりますと、確かに頼朝さまから、院に伊予守への推挙はあったのですが、それは平家滅亡の直後のことで、義経さまが腰越から帰るとすぐに鎌倉から推挙を取り消したいとの申請が院にあったとか。しかし、法皇さまは、兄弟喧嘩を恩賞に反映させる事はおかしいと言って、そのまま伊予守に任命したということだそうです」
「まあひどい話。義経には言っていないのですね」
「あんなに喜ばれているのですから、とても話せませんわ」
「わたしもそのほうがいいと思います。二人だけの秘密にしておきましょう」
二人が、話し合っているのを見て、義経が席を降りて二人に近づいてきた。
「なんだお前達そんなに深刻そうな顔をして。蕨姫のことで俺をとっちめようと二人してよからぬ相談をしているのではないだろうな」
郷子と静は顔を見合わせた。
「もちろんそうですよ。どんな意地悪をしようかと相談していたところです」静が答える。
「ははは、どんな意地悪だ」
「寝てる間に顔に墨を塗ったらどうかと」
郷子が答える。
「ははは、あまりのいい男ぶりに二人ともやきもちを焼いているな」
義経は、あくまで明るくご機嫌だった。二人は、義経の子供のような無邪気さの前に苦笑せざるを得なかった。しかし、義経の機嫌が良かったのもここまでで、伊予守の実態がわかると、また元の不機嫌な義経に逆戻りした。つまり、伊予国は、頼朝の知行国となりその年貢は頼朝に帰属し、伊予守とはその年貢を取り立てて納付する役目の国司（地方官）に過ぎなかったのである。義経は、これまで伊予国を実効的支配下において経済的利益を得ていたのであるが、伊予守に任命されたことによって、むしろそれを失うことになってしまった。今まで許されていた通り伊予国から収納して義経が個人的に費消すれば、それは頼朝に対して横領をはたらいたことになりかねなかった。義経の伊予守への任官は、宴会を催して喜ぶようなことではなかったのである。堀河館は、また、陰気な屋敷に戻った。
その日、郷子が堀河館へ行くと見知らぬ中年の武士と廊下ですれ違った。その狐顔をした武士は、郷子と志乃が歩いてくるのを見ると、お腹の大きい郷子を見てえらそうに言った。
「お前のような者がこんなところで何をしておる」

郷子は、あっけにとられて何も言う事ができなかった。
「ここは武家屋敷で産所ではないぞ。お前のような妊婦がくるところではない。腹を抱えてよたよた歩いていると鬱陶(うっとう)しくてしかたがないではないか」
志乃がきっとした口調で言った。
「あなたはいったいどなたですか。この方は、義経の正室郷御前ですよ」
中年の武士は、一瞬言葉に詰まったが、すぐさま立ち直って言った。
「なんだそうか。わしは義経の叔父だ。正室といえども妊婦などが武家屋敷をうろつかないように義経によく言ってきかせよう」
中年の武士は、その非礼をあやまりもせずに自分の館のように反り返って歩いていった。
郷子が、まだ堀河館に確保している自分の居室にはいると、志乃に言った。
「あの男が何者なのか、須美に聞いてみてくれませんか」
須美なら良く知っているような気がした。
「判りました」
志乃は、そう言うと部屋を出て行ったが、半刻ほどすると戻ってきた。
「あの男の名は新宮十郎行家といい、義朝公の末弟で彼が言ったとおり頼朝さまと判官さまの叔父にあたるそうです」
「源姓ではないのですか」
「熊野新宮にいたことがあるので源の姓を名乗らずに、新宮と称しているということです。おそらく、源姓よりは、貴族らしい姓であるからだろうと、須美殿は推測しています。
須美殿が申すには、
[以仁王(もちひとおう)の平家追討の令旨(りょうじ)を諸国の源氏に届けて決起を促したのは彼です。頼朝さまが決起し、その一ヶ月後に義仲が決起しました。頼朝さまが富士川の戦で大勝利を挙げたので、それを見て行家も独自に決起したのですが、尾張国墨俣川の闘いで平家に惨敗を喫しました。その後、頼朝さまを頼って身を寄せましたが、行家は自分が頼朝決起の功労者であると言いふらし、頼朝さまに叔父風をふかして偉そうに振舞い、実績もないのに所領を要求したりなどしましたので頼朝さまはこの叔父を毛嫌いされたということです。
その後、行家が周囲に頼朝は長幼の序をわきまえない情のない冷血漢だと悪口を言い始めましたので、頼朝さまは激怒されました。身の危険を感じた行家は、木曽義仲に助けを求めたのです。義仲は、父義賢の弟である行家を庇護し叔父として尊重しました。義仲が、平家を倶利伽羅峠で破って都に入洛し後白河法皇に拝謁しました際に、行家は義仲と競い平家を破ったのは自分の功のように言い立てましたので義仲にも嫌われ流浪の身になったとのことです。頼朝さまは、この行家を鎌倉政権にとって危険人物だと見

做し、御家人に対して彼を見つけしだい捕らえて殺すように命じています]ということでした。
「その男がなぜこの堀河館にいるのでしょう」
「数日前に判官さまを頼って突然堀河館に転がり込んできたそうです」
「それで義経はどう対応したのですか」
「判官さまは、叔父上が自分を頼って来てくれたと大層喜び、上席にすえて敬ったので、行家は堀河館の中でえばりだしたのだそうです」
「頼朝さまが誅殺を命じている人物を匿(かくま)えば、頼朝さまが激怒するのは判りそうなものではないですか」
「判官さまは、自分が兄者に取り成してあげるからと慰めているそうです」
　郷子は、頼朝からひどい仕打ちを受けているのにも拘らずに、こんなことを言う義経の無邪気さに言葉を失ってしまう。
　郷子は考える。
（須美は、行家を切るだろうか。恐らく切らないだろう。もし切れば、この堀河館にいられなくなるからだ。しかし、行家が堀河館に潜伏した事実は、もうすでに鎌倉に連絡しているに違いない）
　郷子は、武蔵坊弁慶を見つけると、彼から義経に忠告してもらおうと考えた。義経に直言できるのは弁慶ぐらいしかいないからだ。
「あの新宮十郎行家という人は、頼朝さまの勘気を受けているそうですね。この屋敷に匿うのはまずいのではないでしょうか」
　武蔵坊弁慶は、うなずいた。
「某も、あやつを匿えば鎌倉に反抗しているとの疑惑を持たれかねないから、止めた方がいいと忠告したのだが、『俺を頼ってきた叔父上を路頭に迷わせろというのか』と逆に叱られてしまったよ」
「こういったことは直ぐに伝わるものですから噂を聞きつけて鎌倉から、誰かが調べに来るのではないでしょうか」
「すでに、梶原景時の息子の景季(かげすえ)が、この堀河館を訪問し、判官殿に面会したいと言ってきている」
「義経はどうするつもりでしょう」
「いまは病気ですぐには会えないと返事した」
「そんな事で相手は納得するでしょうか」
「あやつの入れ知恵で、判官殿は病気に見えるようにいまは絶食中だ」
「そんなことまでして！」
「判官殿の人のいいのには呆れてしまうが、われわれがどう忠告しても、本人があやつの口車に乗せられているのでどうしようもない」
　弁慶にもお手上げの状態のようだった。

後日、郷子が、聞いたところでは、景季は鎌倉殿の使者であると強引に義経に面会したが、義経のあまりの憔悴(しょうすい)ぶりに病気であることを認めて何も聞かずに帰ったという。
郷子は、こんな子供だましのような策で鎌倉が納得するとは思えなかった。
（鎌倉はきっと次の手を打ってくる）
遠からず郷子のもとへ、父の河越太郎重頼から密かに親書が届いた。

郷子へ
鎌倉殿が、義経は自分の命令に違反して新宮十郎行家を自宅に匿っており、謀反の心がある事が明らかになったといって、わしに義経の誅殺を命じた。
わしは、婿を殺すわけにはいかないと言って断った。畠山重忠、和田義盛、土肥実平などのそうそうたる侍大将にも当ったが全員断ったそうだ。梶原景時でさえ義経に嫌われているからといって断ったそうだ。結局、土佐坊昌俊(とさのぼうしょうしゅん)というまともな戦も出来ないうつけ者が恩賞目当てで手を挙げた。
こやつが、いま八十騎ほどで、都に向かっている。だが、わしはこやつなどに義経が討たれるはずがないと思っているが、鎌倉殿もそれを承知で送り出したような気がしてならない。鎌倉殿と大江広元などは、こやつが義経に討たれた後のことを何かたくらんでいるのだ。
郷子は、いまの身体では動けないだろうから、そちらで出産したらよい。
義経はどうあれ、郷子まで害が及ぶ事はないから安心していろ。
だがもうこうなった以上、子供が生まれたら一度河越に帰ってきたらよい。
父より

郷子は、とうとうくるべきものが来たと思った。
頼朝や大江広元は、義経を鎌倉幕府創設のための阻害要因として抹殺することに決定したのだ。
郷子は、すぐに武蔵坊弁慶に話した。
「鎌倉から義経に討っ手が派遣されたとの情報があります」
「その噂は、もう都中で評判になっているよ」
「ええ、そんなに早く！　それで義経はどうするつもりなのでしょう」
「あの行家の奴が、判官殿に頼朝追討の宣旨を法皇に要請しようと盛んにけしかけているらしい。あいつは、鎌倉殿に嫌われているからな」
「仮に宣旨を受けても勝てるのでしょうか」
「北の方も気付いていると思うが、腰越から帰った数十名ほどの武士のうち、四国や西国から判官殿の配下に入っていたものは、里帰りと称してどんどん減っている。彼らは、恐らくもう帰ってきまい。沈没する船からねずみが逃げるように、我々を見限っているのだ。あの行家の奴は、判官殿が四国や西国で旗揚げすれば、頼朝が嫌いな者や滅亡し

た平家の残党などが大勢集まるなどと盛んに激(げき)を飛ばしているが、わしは怪しいものだと思っている」
「それではどうしたらよいと思うのですか」
「わしは、奥州藤原氏を頼るほか方法がないだろうと考えている」
「それでは、都を落ちるのですか」
「そういうことにならざるを得ないだろう。ただ、その前に、討っ手を捻りつぶしてやるさ」
　その夜、郷子は陣痛にみまわれた。六条室町亭でのお産の準備は既に整っている。狭い部屋を産室に定め、全ての壁と床の全体を白い布で覆い、布団も白い敷布を厚く敷き詰めてある。郷子も白い肌着一枚で布団に横たわった。これは、お産が穢れと考えられているため、最も邪気のない純白で赤子を迎えるように配慮しているのだ。
　介添えは、すでに評判のいい産婆二人に頼んである。そのほか志乃と雑仕女が大量の白布や産湯などの準備をして待機している。みんな白い衣裳を身に着けていが、その中に、須美がいるのに気がついて、郷子は驚いた。
　須美は、郷子の侍女だからお産を手伝うのは当然と言えば当然だが、郷子は「なぜ？」と思わずにはいられなかった。邪推して考えれば、郷子が産んだ子が男か女かを確かめるために付き添ったとも考えられる。
（男の赤子を生んだらどうなるのだろうか。義経の嫡男として頼朝による殺傷の対象になるのだろうか）
　郷子は、恐怖の目を持って須美を見つめた。須美はさりげなくお産の準備を手伝っている。須美が、席を外した時に志乃に訊いた。
「須美がどうしてここにいるのですか」
「須美殿は、いままで何も郷姫のためにしていないので、ぜひ手伝わせて欲しいといわれました。須美殿はいい人ですよ」
　志乃が何の心配もないように笑顔をみせた。
（志乃まで須美に取り込まれてしまったのだろうか）
　郷子は、暗い気持ちで陣痛に耐えなければならなかった。
　出産の時には、それまで経験したことがない激痛にみまわれたが、一旦生まれてしまえば、その痛みも続かず、それよりも赤子(やや)を抱いたときの至福は何にも替えがたかった。赤子は女の子だった。郷子は安堵した。

　数日後、郷子はまだ産後の疲れが残っている身体を休め、赤子に母乳を与えていた。両腕に抱いた軽くて柔らかい赤子が、乳房から小さな口で無心に乳を飲んでいる横顔を見ていると愛おしさで胸が一杯になる。赤子はあまりにも無防備で母親を頼りきってい

る。郷子は、どんなことがあっても自分で赤子を守るのだと心に誓う。だが、心配なのは、義経がまだ室町亭に姿を見せないことだった。
（義経は、あれほど赤子の誕生を心待ちしていたのに何故赤子の顔をすぐに見に来ないのだろうか）
　堀河館に様子を伺いに行っていた志乃が帰ってくると郷子に報告した。
「判官さまは、『すぐに赤子を見に行きたかったが、すこし事情があっていけなかった。母子ともに順調と聞いて安堵している。遠からず行けると思うので、待っていてくれ』とのことでございました」
「すこしの事情とはなんでしょうか」
（生まれた自分の姫を見に来れないほどの事情とは何だろうか）
　郷子は、すこし不満だった。
「実は、お産と同じ頃に堀河館では土佐坊昌俊の夜襲を受けていたのだそうです」
「夜襲を！」
「弁慶殿から話を聞いて来ました」
　志乃が、弁慶から聞いた話は次のようなものだった。
室町亭が郷子の出産の準備に追われていた頃、土佐坊昌俊は、八十五騎を率いて、既に入洛し三条の持宝寺を宿所にしていた。名目は熊野詣と称していた。
しかし、土佐坊が鎌倉の討っ手であることは、都ではすでに噂になっていて、義経も疑念を持ちながらもその噂は先刻承知していた。そこで、弁慶を持宝寺へ使いに出した。弁慶は、武士達のものものしい様子を見て取ったが、何食わぬ顔で言った。
「いま都は、判官殿が鎌倉殿の代官として在所している。都の治安を預かる検非違使でもある。鎌倉からきたものは、まず、判官殿に入洛の挨拶があってしかるべきである」
　土佐坊は、あわてて「所用がありましたゆえ」と弁解した。
　土佐坊の恩賞目当ての欲望のために連れてこられた侍達は、このために寄せ集められた集団であり、義経の戦上手と、弁慶をはじめとする義経側近の剛勇ぶりを、聞き及んでいたので、もともと腰が半分引けていた。
　弁慶を見て、これが噂に聞く強力無双の荒法師かと黙って見守るばかりである。
　弁慶は有無を言わさず強引に土佐坊を堀河館に連れてきた。
　義経は、土佐坊が堀河館に到着する前に、屋敷にいた数十名の侍をすべて他の宿所に移動させ、甲冑を着せて待機させた。土佐坊が弁慶に連れられて堀河館についたときには、屋敷内はがらんとしてほとんど人気のない状態だった。
　いつも宴会をする大部屋の下座に土佐坊を座らせ、両脇に弁慶と伊勢義盛が座る。土佐坊は切られると思ってか顔面蒼白である。
　義経は、悠然と出てくると上座に座った。
「いつこちらに着いた」
「一昨日でございます」

「なぜ、挨拶にこぬ」
「所要がありましたもので」
「所要とはなんだ」
「熊野詣の準備でございます」
「その割りには、みな甲冑を持っておるそうではないか」
「道中の山賊対策でございます」
「本当に左様か。都のものは、お前が義経を討ちに参ったともっぱらの噂だ」
土佐坊は蒼白になって震えだした。
「滅相もございません」
「そうか。ではそれを証明せよ」
　それで、土佐坊は七枚の誓紙を書いて差し出したという。
　義経は、それを受け取ると上機嫌になって言った。
「ご苦労であった。弁慶、土佐坊をそこまで見送ってくれ。その後どうする」
「室町亭に行って北の方のお産の様子を見てこようかと」
「そうか。よろしく頼む」
「伊勢はどうする」
「某は、ちと野暮用がありまして」
「ははは、女のところであろう。それでは、今夜はこの屋敷は俺と静の二人だけか。久しぶりに水入らずで酒など飲んでのんびりすることにしよう」
　案の定、土佐坊はその夜丑の刻に夜襲を仕掛けてきた。
　その時には、義経側の彼らを迎え撃つ全ての準備が整っていた。

　土佐坊は、敗走すると鞍馬山に逃げたが、すぐに掴まって都に引き戻された。
「お前が差し出した誓紙は嘘か？」
「・・・・・・」
「平気で嘘を言う奴は、人間として性根が腐っている。俺は大嫌いだ」
「判官殿も、館に二人だけだなどと嘘を」
「あれは嘘ではない。作戦だ。お前にそのような誓紙を出したわけではない」
「・・・・・・」
「誰に命令された？」
「鎌倉殿です」
「恩賞はなんだ？」
「老母のために下野国中野庄をいただきました」
「この判官義経を討ち取って、たかがその程度の恩賞か」
　兄が義経を誅殺しようとしている事ははっきりした。
　義経は、土佐坊昌俊を六条河原に引き立て斬首させ、首をさらした。

義経は、このことで兄弟の絆や情といった幻想から完全に脱却して、兄頼朝と決定的に対立せざるを得ないことを悟ったのだった。

第十九章　　了